

<input type="checkbox"/>	_____
<input type="checkbox"/>	_____
<input type="checkbox"/>	_____
<input type="checkbox"/>	_____
<input type="checkbox"/>	_____

偽証罪に関する次の【見解】に従って後記1から5までの【記述】を検討し、誤っているものを2個選びなさい。

【見 解】

A説：偽証罪は、宣誓した証人が客観的事実に反する陳述をした場合に成立する。

B説：偽証罪は、宣誓した証人が自己の記憶に反して陳述をした場合に成立する。

【記 述】

- 1 証人が自己の記憶に反する事実を客観的事実に反すると思いながら陳述したが、それが客観的事実に合致していた場合、A説によれば、偽証罪は成立しない。
- 2 上記1の場合、B説によれば、偽証罪は成立しない。
- 3 証人が客観的事実に反しないと思いながら自己の記憶どおりに陳述したが、それが客観的事実に合致していない場合、A説によれば、偽証罪が成立する。
- 4 証人が自己の記憶に反する事実を客観的事実に反すると思いながら陳述し、それが客観的事実に合致していない場合、A説によっても、B説によっても、偽証罪が成立する。
- 5 証人が自己の記憶に反する事実を客観的事実に反しないと信じて陳述したが、それが客観的事実に合致していない場合、A説によれば、偽証罪は成立しない。

1. ○

A説によれば、陳述内容が客観的事実に合致している限り、その陳述は「虚偽」に該当せず、偽証罪の客観的構成要件を充足しないから、同罪は成立しない。

2. ×

B説によれば、自己の記憶に反して陳述している以上、陳述内容が自己の記憶に反しているという意味での「虚偽」の認識があるので、B説における偽証罪の故意がある。よって、偽証罪が成立する。

3. ×

A説によれば、証人が客観的事実に反しないと思っている以上、陳述内容が客観的事実に反しているという意味での「虚偽」の認識はなく、A説における偽証罪の故意がない。したがって、A説によれば偽証罪は成立しない(38条1項本文)。

4. ○

まず、A説によれば、陳述内容が客観的事実に合致していない場合、その陳述は「虚偽」に該当する。また、証人が客観的事実に反する(合致していない)と思いながら陳述している場合には、「虚偽」の認識も認められる。したがって、本肢では、A説によれば偽証罪が成立する。また、B説によれば、陳述内容が自己の記憶に反する場合、その陳述は「虚偽」に該当する。さらに、証人が自己の記憶に反することを認識している場合、「虚偽」の認識も認められる。したがって、本肢では、B説によっても偽証罪が成立する。

5. ○

A説によれば、証人が、客観的事実に反しない(合致している)と信じている場合、陳述内容が客観的事実に反しているという意味での「虚偽」の認識はなく、A説における偽証罪の故意がない。したがって、A説によれば偽証罪は成立しない。